

ひとつの例

1.

告白すると、私は「全て」を知っているのです。

巧く言えませんが、わたしは「そういう能力」を持っているのです。分かり易く説明すると、超能力とか超常現象とか、そう言った類なのだと思います。正確には、もつと具体性の伴った能力なのですが……。いずれにせよ、私には「全て」が分かっています。私には「全て」というのは「全て」です。そう表現する以外にありません。

本当に私は「全て」を知っているのか。当然の事ですが、あなたは疑いながら、この文章をお読みになつておられると思います。それは本当に、当然の反応だと思います。私だつて、自分にこんな能力さえ無ければ、鼻で笑いたいというのが正直な所なんです。

ともかく、こればかりは論より証拠だと思えます。いきなりで不躰ではありませんが、あなたについて、二・三の「予言」をさせて下さい。

まず、あなたは今、文章を見ています。これは驚く事ではありません。私は「その文章」を通じてあなたを見ています。それだけの事です。

本當の予言は、そこから見える光景を介して述べる事になります。

そこから見えるあなたは……どうやら、ゲームがお好きのようですね。あなたから色々なゲームが、まるで蜚氣楼のように映って見えます。好きでないとしても、多くのゲームに触られた経験はお有りのはずです。

次に、外見的な特長を挙げましょう。髪の毛はさほど長くありません。そして現在、口は閉じていらつしゃいます。口元からは若干、食べた物の匂いがします。でも時間が経ちますから仕方ありません。また歯を磨けばいいだけです。また、あなたは比較的、楽な姿勢でこれを見ていらつしゃいます。……ああ、どうぞ。そのまま結構です。

こんな具合でしょうか。もっと深入つた事もお話出来るのですが、キリがありませんのでこの程度にさせて頂きま

した。どうでしょう。私の言う事を信じて頂けたでしょうか？

「……」
 情じられませんか。そうですか……そうですね。今、私が述べたことは、あなたの一部の情報にすぎませんから、偶然であると言われてしまえば、そこまでです。それは自覚しています。

ですが、もし……あなたさえ良ければ、もう少し詳しくお話させて頂きたいと思つていますが、如何でしょうか？ そもそも、こんな事はあなたの人生には、なんら必要のない事なのですが……。こうやつてお話しているのも私の個人的な「好奇心」でしかないのです。これ以上、詳しいお話をさせて頂いても、あなたには何も「得」がありません。それは先に忠言させて頂きます。

それでも、私の言う事を少しでも気に止めて下さるのなら。どうかこれをご覧下さい。この、「一つの例」を。

2.

「くだらない」

飄々と書かれた戯言を見て、思わずその本に罵倒を浴びせてしまった。ついには、呆れて短編集まで閉じてしまう。なにか「全てを知っている」だ。結局、当たり障りないことを書いてるだけじゃないか。そう。この筆者は「予言」なんか全くしていない。こいつの言っている事はただの「予言めいた確率論」に過ぎないのだ。

筆者が冒頭に「ゲームが好き」と書いたのは、この本の読者が大抵「同人ゲームに感心がある」事を予測していたからだ。この短編集は、同人ゲームライター衆が書いた短編集。手に取る人間は大抵、ゲーム好きであると予想される。ライターである筆者がこの情報を知っているのは、至極当然の事。もともと全員がゲーム好きかは言い切れやしないだろうが、少なくともその確率は高いのだ。

髪の毛、口の匂い、姿勢も同じ理屈で説明できる。

髪について、筆者は「男女の性別」を述べていない。これが予言のミソとなる。つまり、「長い髪」の意識に大きな幅を持たせているのだ。よほど基準から外れていなければ自分を「髪が長い」と認識する人は少ないだろう。「ポサポサ」や「伸びてしまっている」と思う人も正確には除外される。姑息な手だ。

口元の匂いについては「歯磨きをしてから食事するまで

の間にこの文章を見た者」というかなり限定された条件を満たす人物がない限りは、筆者の的中となる。

姿勢については……そもそも、本を見る時にわざわざキツイ姿勢で見る人間は少ない。当然、本を見る姿勢は「楽な姿勢」である場合が多い。……もつとも、「店の中」等の比較的高い可能性を想定していない点、筆者の浅はかさが見えるが。

「まったく、ナンセンスだ」

ため息が漏れる。筆者は何を思っこんな文章を書いたのだろう。表紙から筆者名を確認してみる。……なるほど、ふざけた名前だ。

「はあ……これどれ……」

もはや先に期待を持ってない序章だったが、続きを読んでやる事にする。序章の終わりで筆者は、自分の能力を証明するような「一つの例」を出すと言っていた。どんな浅はかな論理が展開されるのか。そういった意味では、興味がない訳でもない。

——2.

——おめでとうございます。あなたは多くの読者の中から選ばれました。

——あなたとは、この文章を「そのように」読んでいるあ

なたの事です。

二章の文頭には、ただ、こうとだけ書かれていた。

「この文章を『そのように』……はあ？」

次のページをめくってみる。

——あなたは、正確にはもう、この短編集の読者ではありません。

——その証拠を提示する事は難しいですが……。

——「敢えて言うなら、この短編集を見ているあなた「以外」が証人です。」

意味が分からない。筆者は、ただ難しい言葉を羅列しただけなのだろうか。だとしたら、こいつは紛れもなく阿呆だ。

——あなたは、気付いておられないのです。

——あなたが今、この文章を見ている全ての人に注目されている事を。

「注目……全ての人に？」

自分の事ではないとはいえ、不気味な話だった。微妙に